

小田原のどか つなぎプロジェクト2024成果展

# 近代を彫刻／超克する —津奈木・水俣編

小田原のどか



ODAWARA Nodoka Tsunagi Project  
Overcoming/Sculpting Modernity : Tsunagi + Minamata Edition

ODAWARA Nodoka Tsunagi Project

Overcoming/Sculpting Modernity : Tsunagi + Minamata Edition

小田原のどか つなぎプロジェクト2024

近代を彫刻／ちようこく超克する―津奈木・水俣編

つなぎ美術館

# 小田原のどか つなぎプロジェクト2024 近代を彫刻／超克する―津奈木・水俣編

03	はじめに
04	図版
13	本展のためのキーワード
24	論考 「津奈木町中尾地区の田の神と人々」 文・小島摩文
28	論考 「小田原のどかつなぎプロジェクトを終えて」 文・小田原のどか
32	奥付

## はじめに

津奈木町のアートによる町づくりは、水俣病からの地域再生と魅力ある文化的空間の創造を目指し、一九八四年の「緑と彫刻のある町づくり」に始まりました。その活動拠点として二〇〇一年に開館したのが、つなぎ美術館です。二〇〇八年からは、地域資源の再評価と文化芸術活動を担う人材の育成などを目的に、社会教育事業として一年から数年おきに変わるテーマごとに異なる作家を招聘しながら、住民参加型アートプロジェクトを実施してきました。

同プロジェクトの一環として、二〇二三年四月に二か年の計画で始まった「小田原のどかつなぎプロジェクト」では、小田原のどかと住民を中心とした実行委員がアイデアや地域に関する情報を交換し、ユーモアを交えながら表現活動を行いました。一年目は公共空間における彫刻やモニュメントのあり方について考え、選挙の投票所を模したつなぎ美術館の展示室で町内外の人々に津奈木町にある一六点の野外彫刻の中で気になる作品へ票を投じてもらう「彫刻選挙」を実施しました。二年目は一九九三年の上巻の刊行を最後に未刊となっている津奈木町郷

土誌の下巻、津奈木町の田の神の石像、熊本地震からの復興支援策「ONE PIECE 熊本復興プロジェクト」、水俣病犠牲者への慰霊の場として一九九六年に水俣市に建設されたモニュメント「水俣メモリアル」を題材に調査と議論を重ね、そのプロセスと結果を新たな提案とともに展示しました。

また、小田原の鋭い批評の眼差しは自身にも向けられています。「小田原のどかつなぎプロジェクト」終盤に津奈木町立図書館に開設された「小田原文庫」は、美術作品の永久設置に懐疑的な小田原の新たなアイデアであり、一般的な美術作品と比較して受入側に生じる維持管理の費用などが軽減されながらも、作家の思想や取り組みを後世へ伝えることが可能な現代美術としての試みともいえます。

小田原による二年間のプロジェクトは終わりましたが、津奈木町のアートによる町づくりは、今後さまざまな作家や住民の協力を得ながら継続していきます。

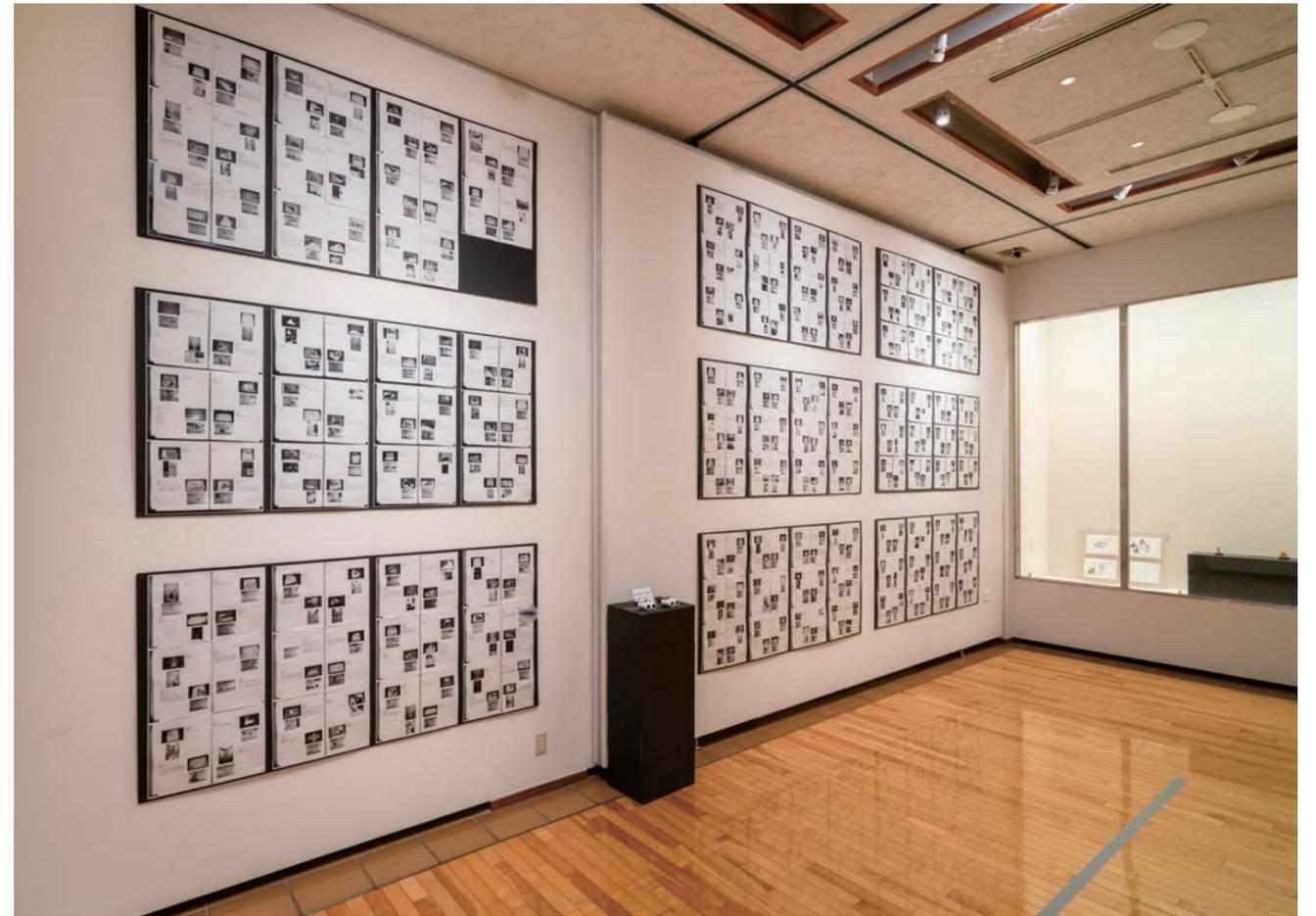
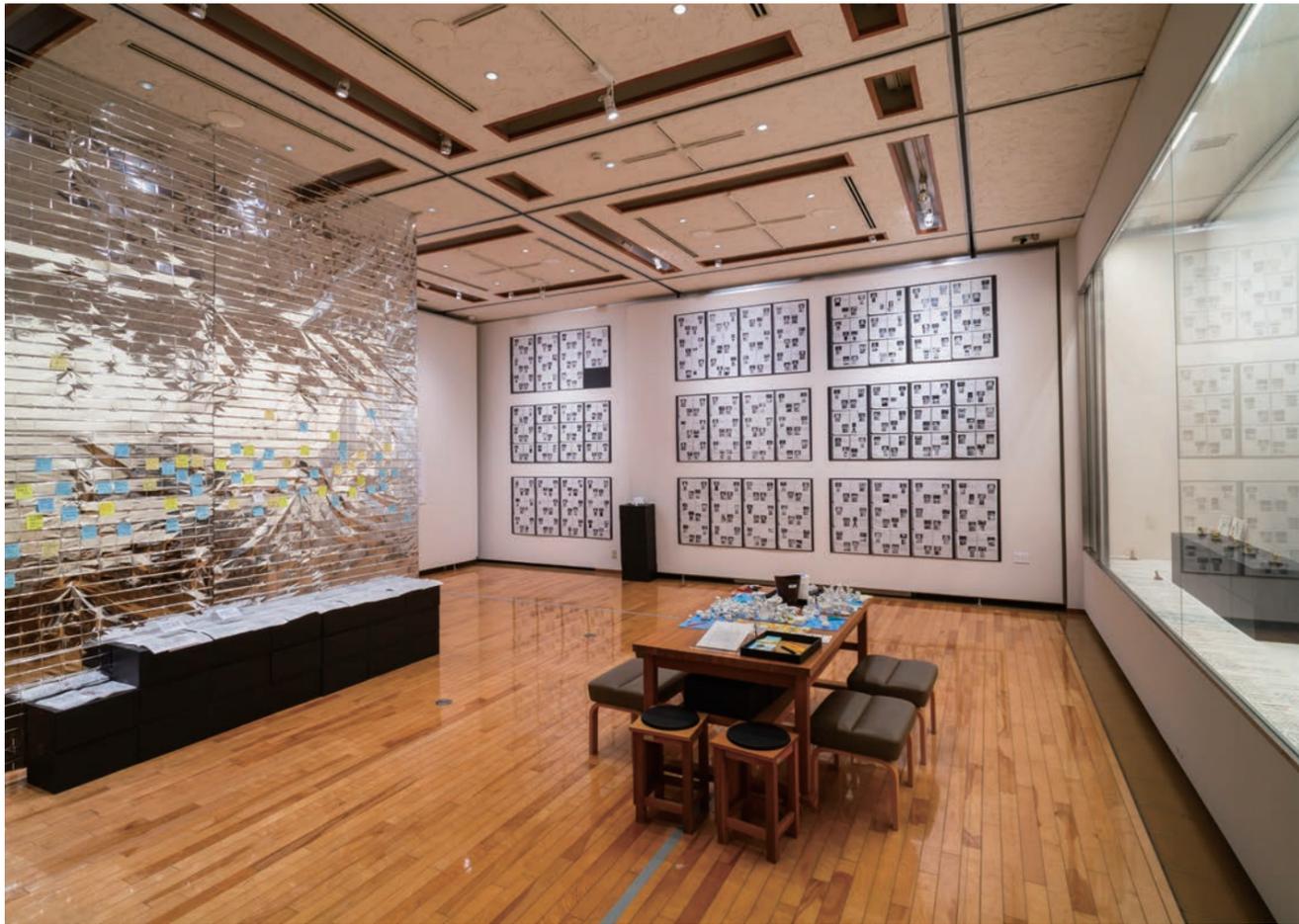


小田原のどかなぎプロジェクト2024成果展

近代を彫刻／超克する

—津奈木・水俣編

小田原のどか







これらのダンボールの中に入っているのは、三〇年ほど前に刊行された『津奈木町誌』上巻の制作に深く関わった岡松荘一郎さんや岡松さんのお父さまが収集した史料です。一九二六年生まれの岡松荘一郎さんは、チッソにお勤めになり、千葉県原市の五井に転勤、定年後に津奈木町に戻り、『津奈木町誌』上巻の刊行チームの主幹のひとりとなりました。

大量の史料の中には、『津奈木町誌』下巻のための史料もあります。本展をきっかけに、小田原のどかつなぎプロジェクトの一環というかたちで、これらの史料を「岡松収集史料」として津奈木町の図書館に収蔵することができました。ここでは、史料の分類過程をご覧いただけます。

『津奈木町誌』の上巻の年表は一八六七年で終わります。『津奈木町誌』下巻をつくとすれば、水俣病と津奈木町の関わりは避けて通れないのではないかと、それはとても難しいことなのではないかと質問した私に、岡松さんは「まったく難しくはないですよ」と答えました。

いつか『津奈木町誌』の下巻がつくられるとき、「岡松収集史料」が活用されることを、心から願っています。

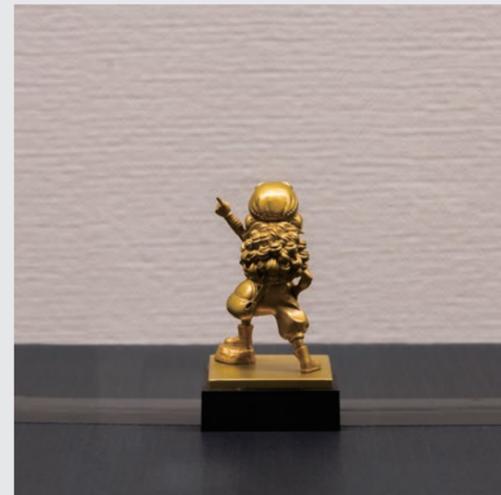




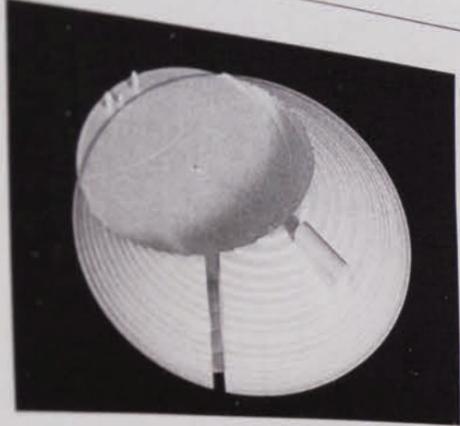
水俣病の慰霊と鎮魂のために設置された水俣メモリアルは、国際コンペを開催したメモリアル設置事情の事例として、類例のない存在です。他方、二〇一六年の熊本地震からの復興の原動力となるようにと、マンガ作品「ワンピース」の登場人物たちをかたどった彫像が、県内各地に設置されています。

近代の公害の原点といわれる水俣病、周期的に起こる大地震。どのようなかたちで、いかにして、後世に伝えるのか。答えはひとつではありません。

被害を受けた方の救済や名誉回復、そして復興のあり方について思いを馳せながら、数々の事例を振り返り、新しいメモリアルをつくってみましょう。新しい田の神さまの石像も、ぜひ創造してみてください。

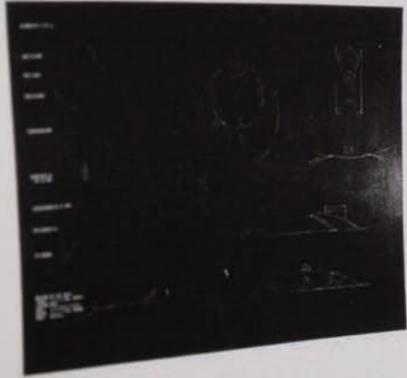






327/1367  
千原 和雄  
福岡県

自然の摂理を忘れず、自然と対立したり超越することなく、人の生活は営まなければならない。  
この提案は、たった今、歩いて来た世界を山の拱間を結界として、太陽・月・地球・山・水を表現した形態の中心の平地へ出る。戒の場となった海に向かって冥福を祈り、反省する平地であり、将来に渡って、肝に銘じる場所である。



329/677  
有馬 浩一  
東京都  
共同設計者：茂木 薫子



330/112  
宮原 大樹  
東京都  
共同設計者：上野 浩二、野口 繁雄、藤原 新一、藤原 正憲  
共同設計者：上野 浩二、野口 繁雄、藤原 新一、藤原 正憲



328/1514  
望月 優香  
東京都







燦燦舎『鹿児島田の神すごろく まさかちよこっと熊本へ 拡張パック』



本展にあわせて、鹿児島島の出版社「燦燦舎」が刊行した『田の神すごろく』の特別拡張版をつくっていただき、津奈木町の田の神石像が『田の神すごろく』に加わりました。

もしかすると、田の神石像の北限は、津奈木町の田の神かもしれません。すごろくで遊びながら、田の神石像がつなぐ文化にふれていただければ幸いです。



津奈木町の田の神石像（撮影：小田原のどか）

## 津奈木町中尾地区の田の神と人々

文・小島摩文（民俗学／鹿児島純心大学教授）

熊本県葦北郡津奈木町の中尾地区には、地域の方々から大切に祀られている田の神石像がある。つなぎ美術館から歩いて一五分の場所だ。

田の神石像は旧島津藩領に特有の習俗だと理解されてきた。旧島津藩領とは、江戸時代に島津氏が治めていた地域という意味で、簡単に言うところ現在の鹿児島県と宮崎県の一部が範囲となる。

これまで、旧島津藩領以外に田の神石像があるとは思われて来なかったのが、津奈木町の田の神石像は、民俗学の研究者の間では知られてこなかった。地域の方々には古くから尊崇してきた親しみのある存在だっただろうと思われるが、専門家の間ではまったく知られていなかった。

「田の神」という概念、あるいは民間信仰は、日本各地にある。しかしそれを具体的に石像として表すのは旧島津藩領の地域だけで行われてきた、と従来考えられてきた。

田の神は、昭和二十六年に初版が出版された柳田国男監修の『民俗学辞典』東京堂出版）でも、四ページに渡って記述されており、その中では「神の名は全国を通じてタノカミが広く用いられ、中略 東北には農神、山梨・長野両県に互って作神、近畿では作り神、兵庫県から山陰の一部にかけて亥の神、瀬戸内海地方には地神」と呼ばれていることを紹介し、さらに「東日本では恵比寿、西日本では大黒が共に田の神と習合され」ているとしている。また、田の神の全国的な特徴として、山の神が春に里に下って田の神になり、稲の成長を守り、秋には再び山に帰るといふ伝承があることを挙げている。

同辞典の「農耕儀礼」の項目では、田の神が「春二月の満月の日に山より里に降り、冬十一月に田から再び高きに帰り上るといふ信仰」は、宮中行事の二月初めの祈年祭と十一月下弦の新嘗祭と祭日が同一であることに重きを置いている。

田の神の依代としては、同辞典では、水口に祭壇を設けるものや木の枝や竹を立てたりするもの、自然石の丸石を祀るものなどが紹介されていて、最

津奈木町で話を聞くと、大きな買物には鹿児島県の出水市に行くという方も多く、子供や孫が鹿児島県の高校に自宅から通っていたという人も何人か出会った。今も昔も、この地は鹿児島との交流がさかんである。

『津奈木町誌 上巻』には、鹿児島県大口市（現伊佐市）の人から直接聞いたとして「大口のものは島津さんより相良さんのほうに親しさを感じる」という言葉を紹介し、筆者は「うれしかった」と感想を述べている。鹿児島側からも隣接する現在の出水市、伊佐市からは、親しみを持たれていたことが伺われる。

平成一四（二〇〇二）年一月の『津奈木公民館報』（三四七号）の「郷土を知ろう」で中尾の田の神石像が紹介されている。

ここが字中尾で、鉄道より南の古中尾から分かれて新開地を拓いた。この人達の努力で、字田中、字一町田という津奈木地区の美田が生れたものと思われる。字田中の真ん中に、「田の神サア」が祀られている。宮崎県や鹿児島県に多い田の神サアだが、芦北ではここが北限のようだ。（中略）今でも中尾の人達は毎年神主さんを招いてお祭りを欠かさない。

津奈木町の文化財保護審議委員を長年つとめ、『津奈木町誌』の編纂にもかかわった岡松莊一郎氏の文章である。

『津奈木町誌 上巻』『民俗編』第八章まつりに「田の神まつり」の項目に「中尾の田の神様」として紹介されており「田の神さんは中尾の諏訪神社の前にあった」と記述されている。耕地整備の折に現在の場所に移されたという。

農民の姿を写した典型的な田の神石像で、右手にしゃもじ、左手にお椀を持っている。米を蒸すときに用いるシキと呼ばれる道具を頭にかぶっている。後ろから見ると陽石になっている。高さは約五八センチ、幅は約三三センチである。台座には文政六（一八二三）年十月二八日に建立したことが刻まれている。

台座には他に「奉納」と中央に大きく彫られ、その下にも文字が見えていますが判読できなかった。そのほか「中尾村中」とも見え、中尾集落が共同で

後に「南九州には田の畔に田の神の石像を立て春秋に祀っている」とあり、田の神石像が南九州特有のものであることを認めている。

津奈木町中尾地区の田の神石像が、田の神石像としては、北限であることを「発見」したのは、小田原のどかさんである。小田原さんは、さらに水俣市古賀町の公民館敷地内に鎮座している田の神も発見している。『新水俣市史』には「路傍の神仏と碑」という章で、六つの「田の神さん」が記録されている。古賀の田の神さん以外は、自然石や石柱などで、いわゆる田の神石像ではない。

「古賀の田の神さん」は、水俣市の市街地にあるが、『新水俣市史』には「明治末期ごろまでは周辺部は田圃で家も少な」かったとある。さらに市史には「祭日は十月の亥の日、その年収穫した新米で餅を揚ぎ藁苞に入れて田ん神さんに供え、お神酒をあげて収穫を感謝し来年の豊作を祈願した」とある。もちろん、どちらも地元の方々には大事にされてきた神様で、「発見」というのは、不適切だが、田の神研究者や田の神ファンの間では知られていなかったのも、やはり、発見と言えるだろう。

今年（令和六年）文化庁の認定を受けた『水俣市文化財保存活用地域計画』の「未指定文化財の概要」の民俗文化財の項目では「鹿児島に多く分布している田の神像もあることから、鹿児島県の文化が伝播していることがわかります」としていることから、田の神石像の存在に水俣市は気づいていたことがわかる。

水俣市や津奈木町は、中世より相良氏が治めていたが、天正九（一五八一）年に、島津氏に水俣城を攻略され、天正一五（一五八七）年に島津氏が豊臣秀吉に制圧されるまで島津氏の領地となっていた。

江戸時代には、水俣、津奈木は島津氏の参勤交代の経路でもあり、鹿児島との行き来があった。また、浄土真宗を禁教とした島津藩領内から管理の厳しい境界を越えて水俣の源光寺に参詣する人々もいたという。

石像を作った事が伺われる。

ただ、台座が蓮華の形になっている点、田の神石像本体と台座との石材が異なっているように見える点などから、田の神石像自体が文政六年に作られたかどうかは疑問が残る。

現在、この田の神石像は中尾地区の水利組合の方々が中心になってお祀りしている。一月二三日、宮中では新嘗祭が行われる日に神主に依頼して神事を行っている。

今年（令和六年）の田の神様の行事に参加した。朝十時から地域の方々が出て田の畔などの草刈りをする伺っていたので、十時ごろ田の神石像のところに行ったがすでに作業は粗方終わっていた。そのあと、古い注連縄を外し、新しい注連縄を田の神と記念碑とに張り、日本酒などが供えられた。十一時から神主が祝詞を奏上して神事が行われた。

印象的だったのが、神事が始まるのを待つ間、田の神石像の前の田の畔に組合員の方々が腰かけて、今後の稲作に関する助成金の話や組合の役員の話などをしていたことだ。

現実的な農業の話と田の神を祀るという行為が違和感なく同居しているところに田の神が生きている信仰としてこの地域に根ざしていることを表していると思った。資源として活用されているわけではなく、素朴に信仰の対象となっていることが地域にとって大切なのだと思う。

神事が終わると地区の公民館で直会が行われた。この年は熊本県からの献上米を津奈木町の農家に依頼することになり、組合員である林賢二さん、恵子さん夫妻が選ばれ、直会では、新嘗祭献穀者として宮中賢所参集所でおこなわれた天皇陛下とのご会釈の様子などの報告もあった。会が盛り上がりれば盛り上がるほどに作物の話が出てくる。新たに挑戦したい作物について肥料のことや品種のことなど、先行して栽培している方から情報を得たり、誰の息子が新たに兼業農家になろうとしているなど前向きの話が多かったのもうれしかった。

田の神石像をひとつのよりどころとしながら地域が強い絆で結ばれていることを感じた一日であった。



## 小田原のどかつなぎプロジェクトを終えて

文・小田原のどか

熊本県葦北郡津奈木町の町立美術館「つなぎ美術館」に二カ年の住民参画型アートプロジェクトの依頼を受け、わたしが試みたかったのは、自作を「住民参画型」として進めるとともに、つなぎ美術館の複数の彫刻を「住民参画型」の視座から点検してみようということでした。

一九七〇年代、日本各地で「彫刻のあるまちづくり事業」が実施されました。一九八四年から始まり、「水俣病からの地域再生」という使命が課せられた津奈木町の彫刻設置事業は、とくに興味深い事例のひとつと言えます。わたしの出身地であり、自身の活動の方向性を決定づけた宮城県仙台市の彫刻設置事業が津奈木町の彫刻設置事業に際して参照されていることも、「緑と彫刻のあるまち」を掲げる津奈木町に特別の関心を寄せることになりました。

そうして、町の方々によって組織された実行委員会のみなさんとともにプロジェクトを展開し、初年度は津奈木町の屋外彫刻を調査し、「彫刻選挙」を実施しました。「彫刻選挙」でわたしは、人気投票をしたかったわけでも、当落を決めたかったわけでもなく、投票というものを通じて、「住民参画型」の視座から、今いちど屋外彫刻がある意味を考える機会をつくらうと考えました。民主主義において、投票とは、手段であって目的ではない。そうして実施した彫刻選挙でもっとも票を得た『千代』は、津奈木町に伝わる話をもとにした彫刻でした。

津奈木町と関わりが深い彫刻である『千代』は、「なぜこの場所にこの彫刻が置かれているのか」が明快です。また、「彫刻選挙」に伴うアンケートには、「《千代》が」駅前に設置されており印象に残った」というものが見られました。津奈木町の方に千代の説話に親しみを覚えている人が多いこと、町外から鉄道で来場した方へのインパクトなどが、高い得票を得た理由だと考えられます。

そしてまた、投票という行為においては、白票や無効票も重要です。このたびの彫刻選挙では、何らかのメッセージを込めた無効票はありませんでした。

だが、何も選ばないことを選ぶこともまた、公共彫刻を考えるうえで必要です。津奈木町だけではなく公共彫刻の設置に際しては、住民の意見が反映される機会が設けられることは非常にまれです。公共彫刻とは、いったい誰が選んだものなのでしょう？ 白票はそのことを気づかせてくれるように思います。

初年度の展覧会の撤収最終日、美術館からほど近い田んぼの真ん中に、石碑のようなものを見つけました。近づいてみると、なんと田の神の石像でした。田の神石像は、旧島津藩の領域、鹿兒島や宮崎の文化として知られませんが、まさか熊本県にもあるとは驚きました。調べてみると、津奈木町の隣の水俣市にも、複数の田の神石像があることがわかりました。

結果的に最終年度は、これまで彫刻の近代に焦点を当てていた自分のプロジェクトが大きく展開するきっかけとなりました。とくに田の神の石像は、「作者」や「たったひとつの作品」を自明とする近代の美術制度を逆照射するものとして、とても新鮮に感じられました。田の神の石像、熊本地震とアニメキャラクター像、そして水俣メモリアル。それらを軸に、「住民参画型」の視座をもって、津奈木町に何をのこせるかを考えました。

「鹿兒島田の神すごろく」の存在は、津奈木町の濱口りさんに教えてもらいました。鹿兒島の出版社「燦燦舎」の鮫島亮二さんとさめしまことえさん、東川隆太郎さんのお力を借りて、「鹿兒島田の神すごろく拡張版」をつくることができました。水俣の田の神石像については、吉村純さん、原田利恵さんにもご協力いただきました。様々な世代の方が遊べるすごろくを通じて、津奈木町と諸地域の関わりや、田の神石像への関心をいっそう深めるきっかけになればと企図しています。

加えて、三〇年前に上巻が刊行されたきりの『津奈木町誌』は、初年度からの関心事でした。もし『津奈木町誌』の下巻が刊行されるならば、水俣病と津奈木町の関わりを避けることはできません。『津奈木町誌』の下巻を想

像することを、未来の津奈木町の方々に託したいと思い、上巻の編纂に関わった岡松荘一郎さんが収集した史料を、津奈木町の図書館に収蔵することができました。これは「岡松収集史料」として、図書館で閲覧が可能になります。数年後、あるいは数十年後、『津奈木町誌』の下巻が刊行される際に、「岡松収集史料」が参照されることを願います。

そして、小田原のどかつなぎプロジェクトの最後の展開として、津奈木町の図書館に「小田原文庫」を開設しました。これは、「永久設置」とは何かを考える手掛かりとして設置するものです。水俣メモリアルの詳細を参照することもできます。津奈木町に訪れる方、住まう方に向けて、「住民参画型」というあり方を考え続ける手掛かりとなれば幸いです。

様々な実践を支えてくださった、つなぎ美術館と実行委員会みなさんに感謝いたします。

**小田原のどかプロフィール**  
一九八五年、「彫刻のある街づくり事業」で知られる宮城県仙台市に生まれる。高校から彫刻を学び、筑波大学で芸術学博士号を取得。彫刻研究者、評論家としても活動し、『近代を彫刻／超克する』（講談社、二〇二一年）、『モニュメント原論・思想的課題としての彫刻』（青土社、二〇二三年）、『この国（近代日本）の芸術…（日本美術史）を脱帝国主義化する』（山本浩貴との共編、月曜社、二〇二三年）などの著作がある。国立西洋美術館、東京都写真美術館などでの企画展に参加。つなぎ美術館での展覧会が公立美術館での初個展となる。『芸術新潮』『東京新聞』で美術評を連載。横浜国立大学専任講師。



上：田の神石像と祭り

下：「小田原文庫」開設予定の津奈木町立図書館の一角

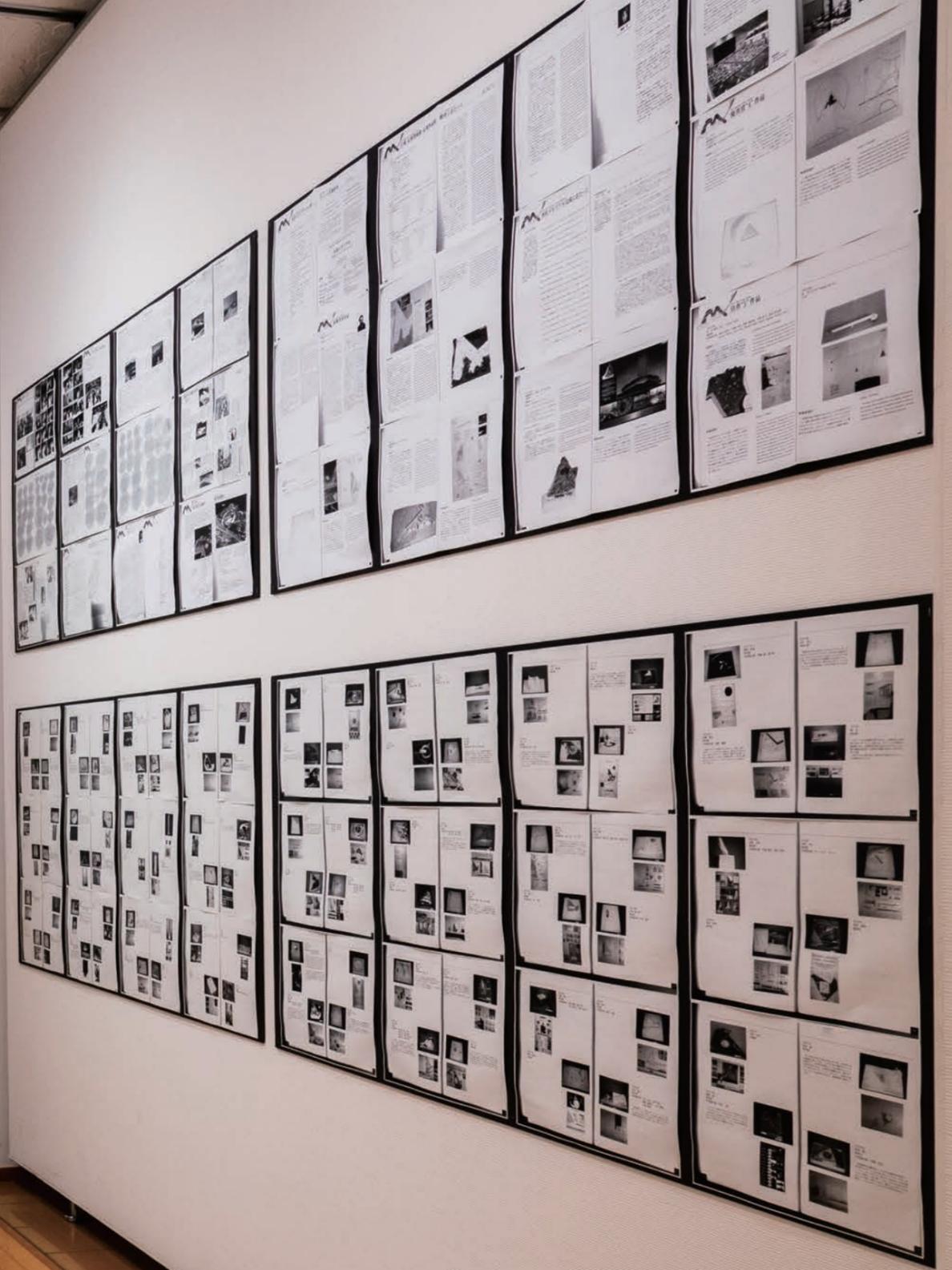
(撮影：小田原のどか)

小田原のどかつなぎプロジェクト2024春夏

近代を彫刻／超克する

—津奈木・水俣編

小田原のどか



小田原のどか つなぎプロジェクト2024  
近代を彫刻／超克する—津奈木・水俣編

◎本カタログは以下の展覧会に関連して発行されました。

小田原のどかつなぎプロジェクト 2024 成果展  
「小田原のどか 近代を彫刻／超克する—津奈木・水俣編」

会期 2024年9月7日(土)～11月24日(日)  
開館時間 10:00～17:00(入館は16:30まで)  
休館日 水曜日(祝日の場合は翌平日)  
会場 1階展示室  
主催 つなぎ美術館(津奈木町)  
助成 公益財団法人水俣・芦北地域振興財団

この事業は、水俣芦北振興計画に基づく地域振興事業として、  
水俣・芦北地域振興財団の助成により実施されました。

実行委員：新立みゆき 竹田恵 長友美波 中村圭 林郁郎 濱口りさ  
松田修 松本美由紀  
協力：山田大揮 燦燦舎 さめしまことえ

関連プログラム

[※二次元バーコードよりつなぎ美術館の  
YouTubeアカウントのアーカイブ動画がご覧いただけます]

オープニングトーク

日時 9月7日(土) 14:00～14:45  
ゲスト 小田原のどか



対談

「津奈木町の田の神と人々」  
日時 11月3日(日) 14:00～15:30  
ゲスト 小島摩文(民俗学者/鹿児島純心大学教授)  
小田原のどか



対談

「津奈木スタディツアー+貝拾い」  
日時 11月4日(月・祝) 13:00～16:30  
ゲスト 小松原織香(哲学研究者)  
小田原のどか



鼎談

「写真家と文化研究者と彫刻家が思う津奈木・水俣」  
日時 11月23日(土) 14:00～15:30  
ゲスト 金川晋吾(写真家)  
山本浩貴(文化研究者)  
小田原のどか



2025年1月31日発行

執筆 小田原のどか  
小島摩文  
楠本智郎

デザイン 米山菜津子  
撮影 金川晋吾

発行 つなぎ美術館

無断転載、複製を禁じます。  
著作権は作家に帰属します。

つなぎ美術館  
〒869-5603  
熊本県葦北郡津奈木町岩城494  
TEL 0966-61-2222  
FAX 0966-61-2223  
www.tsunagi-art.jp